

者さんを担当することが多く、今でいう緩和ケアの道に進もうと考えていましたが、当時、医学部長になられていた杉町先生から、医学教育センター助手の公募の案内が来ました。患者さんの不安や痛みを引き受ける医師の仕事は、こんなにやりがいがあると思って究めたいと思うのに、自分が学生の頃は、なぜ全く知らずに過ごしていたのだろうか、学生がやりがいを感じて究めたいような教育にしたら、学生は興味を持って勉強するのではないかと杉町先生にお話ししたことが、医学教育を始めたきっかけになりました。

その後、日本の医学教育は、グローバル化の波とともにやって来た、医療面接や OSCE（オスキー）と呼ばれる実技試験、診療参加型臨床実習など、我々の学生時代にはなかった、様々な学修方法や試験方法が、文部科学省の方針として各医学部に導入されました。そして、これらは全国化、標準化され、遂に、医師の働き方改革のための法改正の一環として、医師法17条において、OSCE を含む共用試験に合格した医学生は、我々医師と並び医業をなす主体として規定されるに至っています。

熊本大学から、日本の、そして世界の医学教育を未来に向かって発展させる、教育実践と学術成果を発信できるよう、その礎を築いて参りたいと存じます。皆様からのご指導ご支援を何卒よろしくお願い申し上げます。

熊本大学大学院生命科学研究部 血液・膠原病・感染症内科学講座

教授 安 永 純一郎



令和6年（2024年）1月16日付で、熊本大学大学院生命科学研究部血液・膠原病・感染症内科学講座の教授に就任いたしました安永純一郎と申します。私は熊本生まれ熊本育ちで、平成7年（1995年）に熊本大学医学部を卒業し、第二内科（現在の

血液・膠原病・感染症内科学講座）に入局しました。元々悪性疾患に興味があり、内科的に治癒を目指すことができる造血器腫瘍の診療に携わりたかったことが理由です。当時第二内科は高月清先生が主宰されていました。高月先生は、成人T細胞白血病（ATL）が

他の造血器腫瘍とは異なる独立した疾患であるということ、原因であるヒトT細胞白血病ウイルス1型（HTLV-1）が同定される前に、世界に先駆けて提唱されました。そのため、第二内科はATL研究及び診療のメッカとも言える講座でした。第二内科及び県内の関連病院で多くのATL患者の診療に携わる中で、このATLという疾患を深く知りたいと考えるようになり、平成11年（1999年）に熊本大学大学院医学研究科に入学し、HTLV-1の研究を開始しました。平成15年（2003年）に医学博士を取得後、京都大学ウイルス研究所に異動し、引き続きATLの発がん機序に関する研究を行いました。平成19年（2007年）から22年（2010年）まで米国国立衛生研究所・国立アレルギー・感染症研究所に留学、さらに帰国後も京都大学にてHTLV-1による発がんメカニズムと新規治療法開発に関する研究を継続しました。令和元年（2019年）に熊本大学大学院生命科学研究部血液・膠原病・感染症内科に准教授として戻って参り、この度教授を拝命いたしました。これまでに培ってきた基礎研究の知識、技術を臨床講座での研究、診療、また教育に生かすことを常に考えています。その中で、現代の医学の進歩と臨床応用へのスピードが加速度的に増していることを日々実感しています。例えば、造血幹細胞移植療法の改良や支持療法の進歩、続々と登場する分子標的薬や免疫療法などにより、ATLを始め多くの血液疾患や膠原病に新たな効果が期待できるようになりました。中でも、悪性リンパ腫に対するキメラ抗原受容体T細胞療法（CAR-T療法）は遺伝子組換え技術によって作成した細胞を、実際に患者に投与するという遺伝子療法であり、医療が新たなステージに到達したことを実感します。一方で、先の新型コロナウイルスのように、未知の病原体や疾患に対峙し、克服していく研究能力、診療技術も大学病院に求められると考えます。高月清先生がATLを見出し、満屋裕明先生が抗HIV薬の開発によってエイズを死の病から慢性感染症へと変えられたように、新たに興ってくる疾患や、これまで治癒が期待できなかった疾患の克服に貢献できる講座を目指したいと考えております。そのためには関連病院や他診療科との連携やご助言が不可欠です。今後ともご指導ご支援の程、よろしくお願い申し上げます。